

グリム童話翻訳の歴史的概観

——著者による童話八編の新訳と共に——

梅 内 幸 信

第一節 日本におけるグリム童話翻訳

一般に、海外の文学に関する研究は、特定の作家ないし文学の簡単な紹介から始まり、続いてその文学作品の翻訳紹介が行なわれ、ある程度作品の翻訳紹介が済んだ段階で、その作家の詳しい紹介と共に、本格的な文学研究が行なわれる。この研究手続きには、ときとして若干の異同があるとはいえ、文学研究の基本的な道筋には、大きな変更は見られない。つまり、文学研究においても、料理のコースにおけるように、胃の消化が支障なく進むように、軽いものから重いもの、そして最後に、口直しへという具合に、研究が行なわれるのである。この意味において、文学研究における「メイン・ディッシュ」は、言うまでもなく、作品および作家の研究ということになるであろうが、しかし、読者の立場から見れば、作品そのものになると言わざるをえない。

日本において、『グリム童話集』は、蘭学を通じてすでに江戸時代から紹介され、一八八七（明治二〇）年に管了法に

よって日本語に翻訳された。その翻訳名は、『西洋古事神仙叢話』であつた。⁽¹⁾つまり、江戸時代に鎖国政策が取られていたとはいえ、長崎では出島を通じてオランダからヨーロッパの文化が流入していたのである。オランダの政治家・文化人、またさらには、これに続く宣教師たちを通じて、「グリム童話」は紹介されたのであろう。というのも、『グリム童話集』の根底を貫いている「勸善懲惡の精神」は、キリスト教の倫理とも通じるところが大いにある上に、これを一般民衆に分かりやすく説く場合に、「グリム童話」は非常に便利なものであるからである。

グリム童話は、日本においてばかりではなく、世界各国においても、非常に愛読されている。古今東西、これほどの読者を獲得している文学作品は、聖書を除外すれば、他には存在しないと言つて良いほどである。その最大の理由は、グリム童話が、子どもにとっての格好の読み物であるということになるであろう。しかしながら、『グリム童話集』の原題が、『子どもと家庭のための童話』であるという点からも分かるように、この童話集は、決して子どもだけのために書かれたのではなく、子ども以外の家庭の構成員、すなわち、おじいさんやおばあさん、お母さん、お父さんといった人々のためにも書かれたのである。グリム童話の研究に当たっては、この観点を看過してはならぬであろう。

実際、日本において現在、グリム童話というより、むしろ、童話一般が、爆発的と言つて良いほどのブームをもたらしている。その火付け役を果たしたのは、恐らく、『初版 グリム童話集』であろうと思われる。⁽²⁾すでにそれ以前に出版されていた、金田鬼一氏の『グリム童話集』(岩波文庫、全五巻)⁽³⁾も存在しているのに、『初版 グリム童話集』の方が、大変な売れ行きを示しているのである。その理由は、ひとえに、「初版」というところにその理由が隠されていると考えられる。岩波文庫の『グリム童話集』は、第七版からの翻訳である。思うに、一般の読者は、『グリム童話集』が第七版まで出版されているという事実を明確に知ってはいないのであろう。それゆえ、「初版」と聞くと読者は、なにかしら「最も古く、最も原型に近いもの」、従つてまた、「本物である」という印象を受けるのではなからうか。ただし、『初版 グ

リム童話集』が好評を博したという、一層大きな理由は、その「残酷な面」であると言わねばならない。というのも、この翻訳に連動する形で、「残酷シリーズ」ないし「恐怖シリーズ」が次々と出版されているからである。⁽⁴⁾加うるに、そのシリーズは、単に「グリム童話」に関するものばかりではなく、「グリム童話よりもっと残酷な日本の童話」といったタイトルで、続々と出版されている。⁽⁵⁾

童話から少し目をそらして、映画界を覗いて見ると、こちらでも「リング」やら「らせん」やら、新たな恐怖を売り物とする新作が相次いでいる。このブームは、今の日本の新現象かと思えば、どうやらそうでもない。映画の本場と言えるアメリカでも、新種の恐怖映画がブームを引き起こしていると言われる。現代の無機質の若者には、恐怖が合うらしい。筆者の目から見れば、現代の若者は個性に乏しく、それがゆえに逆に、強烈な個性を求めているように思われてならない。恐怖は、快感とは違って、存在を凝縮させる力である。恐怖の凝縮力によって、若者たちは、自分の存在感を必死に確認しようと努めているのであろう。⁽⁶⁾

いずれにせよ、『グリム童話集』の第七版におけるよりも、初版における方が、より多くの残酷な描写が見られることは確かである。しかしながら、このことを、グリム兄弟に嗜虐趣味があったなどと理解してはならない。彼らが童話において残酷な場面を描写するのは、「勧善懲悪の精神」を説くためのものである。⁽⁷⁾つまり、悪を明確に罰することによって、子どもに「善の勧め」を説くことを目的としている。

ところで、日本における『グリム童話集』の代表的な翻訳を時代順に列挙すると、次の通りである。ただし、ここでは、少なくとも「選集」レベル以上のものだけを対象としている。ここで大いに役立つ文献は、野村滋氏が、「ドイツ文学」第八〇号に掲載している書誌「日本におけるグリム研究文献」である。⁽⁸⁾

- 一、『西洋古事神仙叢話』桐南居士（管子法）訳、集成社、東京一八八七年。
- 二、『八ツ山羊』呉文聰訳、弘文社、東京一八八七年。
- 三、『独逸童話集』橋本青雨訳、大日本国民中学会、東京一九〇六年。
- 四、『家庭お伽噺』和田垣謙三・星野久成訳、小川尚栄堂、東京一九〇九年。
- 五、『グリム御伽話』中島孤島訳、富山房、東京一九一六年。
- 六、『グリム童話集』金田鬼一訳、（第一部）「世界童話大系」第二卷所収、世界童話大系刊行会、東京一九二四年。
（第二部）「世界童話大系」第二三卷所収、世界童話大系刊行会、東京一九二七年。
- 七、『祖稿グリム童話全集』田中梅吉訳、東京堂、東京一九四九年。
- 八、『グリム昔話集』〔全五冊〕関啓吾・川端豊彦訳、角川書店、東京一九五四―六三年。
- 九、『完訳版 グリム童話集』〔全五巻〕「第一巻・矢崎源九郎訳、第二巻・大畑末吉訳、第三巻・植田敏郎訳、第四巻・山室静訳、第五巻・国松孝二訳」偕成社、東京一九五四―五五年。
- 一〇、『学年別おはなし文庫 グリム童話三年生』土屋由岐雄著、偕成社、東京（初版一九五七年）一九九九年。
- 一一、『グリム童話集』〔全三冊〕相良守峯訳、岩波書店、東京一九六六年。
- 一二、『白雪姫』（グリム童話集Ⅰ）、『ヘンゼルとグレーテル』（グリム童話集Ⅱ）、『ブレーメンの音楽師』（グリム童話集Ⅲ）、植田敏郎訳、新潮社、東京一九六七年。
- 一三、『グリム童話全集』〔全三冊〕高橋健二訳、小学館、東京一九七六年。
- 一四、『完訳 グリム童話集』〔全五冊〕金田鬼一訳、岩波書店、東京一九七九年。
- 一五、『読みきかせ グリム名作劇場・二〇話』小学館、東京一九八九年。

一六、『グリム童話』（上・下）池内紀訳、筑摩書房、東京一九九二年。

一七、『子どもに語る グリムの昔話』（全六巻）佐々梨代子・野村滋訳、こぐま社、東京一九九〇—一九九三年。

一八、『グリム童話集』（全四巻）池田香代子訳、講談社、東京一九九五年。

一九、『グリム童話集』リディアポストマ（絵）、ウィルヘルム菊江（訳）、西村書店、新潟一九九五年。

二〇、『完訳 グリム童話——子どもと家庭のメルヒェン集——』（I・II）小澤俊夫訳、ぎょうせい、東京一九九七年。

二一、『初版 グリム童話集』（全四巻）吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九七年。

二二、『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九八年。

二三、『グリム童話』（小学館世界の名作一六）原作／グリム兄弟、監修／西本鶏介、文／乾侑美子、小学館、東京一九九九年。

二四、『こどもと大人のためのメルヘン グリム童話』ポプラ社、東京一九九九年。

二五、『こどもと大人のためのメルヘン グリム童話II』ポプラ社、東京一九九九年。

すでに述べたように、ここでは選集レベル以上のものが列挙されている。しかしながら、日本におけるグリム童話の訳史においては、個別の童話やいくつかの童話の翻訳という形式を採った絵本が最も多いことが、容易に看取される。しかも、これらの童話の物語は、子どもの年齢別に、様々な形で翻案されたものが圧倒的に多数である。この意味において、十番目の翻案は、「学年別おはなし文庫」という条件が付けられている点でも、非常に興味深い。恐らく、さらに詳細なリストを作成してみれば、この種の翻案と、この種の翻案に基づく絵本が、その大多数を占めることは容易に予測される。

従って、このリストからもれている子ども向きの選集・絵本が、これ以外にもかなり存在することはお断りしておかなくてはならない。

筆者の経験によれば、グリム童話をなんらかの形で知っている学生は多いのであるが、しかし、彼らの大半は、絵本・映画等を通じてグリム童話に出会っており、グリム兄弟の『グリム童話集』そのものを通じて知っている学生は、驚くほど少ない。グリム童話は有名であるが、しかし、『グリム童話集』そのものは、案外読者に知られていないのである。

第二節 グリム童話の翻案について

『グリム童話集』は、確かに、本来家庭における子どもばかりではなく、大人のためにも書かれたのであるが、しかし、現代における読者ということになると、やはり、大人よりは子どもの方が圧倒的に多数を占めるであろう。ただし、ここにおいて留意しなければならないことは、これらの子どもたちが読むグリム童話は、大半は翻案になるテキストであるという事実である。

実際、『白雪姫』一つを取ってみても、恐らく『グリム童話集』の中に収められている形での物語が子どもたちによって読まれることは、現代において極めて稀であると思われる。むしろ、それぞれの時代において、それぞれの国の比較的無名の作家、ないし詩人が書き換えたテキストの方が読まれていると言えよう。試みに、幼稚園児向けに書き換えられた『しらゆきひめ』を読んでみると、グリム童話に見られる反復描写がかなり省略され、継母の三度に互る白雪姫殺害のたぐらみは、毒リンゴ一回に限定されている⁽⁹⁾。また、継母は、焼けた鉄の靴を履かされて処刑されるのではなく、白雪姫を殺す目的で、王子と白雪姫の結婚式へ「まほうのほうき」⁽¹⁰⁾に乗って出かける途中で、雷に当たって死ぬ形を採っている。

恐らく、この描写は、焼けた鉄の靴を履かせて殺すという中世の処刑法が、現代では一般に馴染みのないものとなっているからなのであろう。

この種の翻案は、低年齢層の子どもに向けた絵本では、頻繁に見られるものである。とりわけ、子どもが独りで読むように作られている絵本では、オリジナルなグリム童話は、皆無と言って良いほどに少ない。これも止むを得ないことであるとはいっても、望ましいのは、やはり、おばあさんやおじいさん、あるいはお母さんやお父さんが、ときどき解説を交えながらオリジナルのグリム童話を子どもに読んで聞かせることであろうと思われる。これによって、家庭内における親子の絆も強められるというものである。テレビを見たり、テレビ・ゲーム、あるいは個人的な趣味の追求が主流となっている現代において、親子の交流は、益々少なくなってきた。しかしながら、世代間を繋ぐ親子の交流が減ってきていることは、次世代へ予想以上の悪しき影響を与えると考えられる。子どもは、親を模倣する。とはいえ、そこに全く会話が媒介しないとすれば、子どもは親の外面的態度のみを模倣することとなって、肝腎の精神面は、なかなか模倣できないという結果をもたらすであろう。

第三節 『グリム童話集』の版について

『グリム童話集』と聞くと、なにかしら現在あるような形で、初めから一定数の童話が収録されていたかのような印象を与えるが、しかし、この童話集は、一八二二年に初版第一巻が、続いて一八一五年に初版第二巻が出版されて以来、一八五七年に第七版が出版されるまでに、その童話の収録数ばかりではなく、かなりの童話は、文体上・内容上の修正を施されている。⁽¹¹⁾ それどころか、初版以降削除された童話や新たに追加された童話も少なからず存在している。⁽¹²⁾ ちなみに、初

版以降の収録童話数を列挙すれば、次の通りである。⁽¹³⁾

- | | |
|-------------------------|-----|
| 一、初版（第一卷一八一二年、第二卷一八一五年） | 一五六 |
| 二、第二版（二八一九年） | 一六一 |
| 三、第三版（二八三七年） | 一六八 |
| 四、第四版（二八四〇年） | 一七八 |
| 五、第五版（二八四三年） | 一九四 |
| 六、第六版（二八五〇年） | 二〇〇 |
| 七、第七版（二八五七年） | 二〇〇 |

次に、これまで出版されている『グリム童話集』全訳の中で、現在入手しうる代表的なものを調べてみると、それらは異なった版を用いて訳出していることが分かる。版の種類をその項目の冒頭に明記して、それらの翻訳を列挙すると次の通りである。

- 一、「第七版」、『完訳 グリム童話集〔全五冊〕』金田鬼一訳、岩波書店、東京一九七九年。
- 二、「第七版」、『完訳版 グリム童話集〕〔全五冊〕』第一卷・矢崎源九郎訳、第二卷・大畑末吉訳、第三卷・植田敏郎訳、第四卷・山室静訳、第五卷・国松孝二訳、偕成社、東京一九八〇年。
- 三、「第二版」、『完訳 グリム童話——子どもと家庭のメルヒェン集——〕〔全二卷〕小澤俊夫訳、ぎょうせい、東京

一九八五年。

- 四、「初版」、『初版 グリム童話集』（全四巻）吉原高志・吉原素子訳、白水社、東京一九九七年。
- 五、「第七版」、『グリム昔話集』（全三冊）関啓吾・川端豊彦訳、角川書店、東京一九九九年。

ところで、ドイツにおける「ドイツ古典叢書出版社」から出版された『グリム童話集』（一九八五年）は、グリム童話研究の現在生存している研究者の中で、第一人者と言えるハインツ・レレケ教授が編集出版したものである。⁽¹⁴⁾ ここにおいて彼は、第三版に基づいて編集している。ところが、同様に彼が、それ以前に編集出版し、レクラム文庫に収められている『グリム童話集』（全三巻、一九八〇年）は、第七版に基づいている。一般に、研究者にとって、先達の研究者に追随することは、なんとなく憚られることであろう。従って、他の研究者とは違った研究方法ないし研究成果を提出したいという願望は、もつともなことである。しかしながら、『グリム童話集』の編集ないし翻訳に関して異なった版に基づくという研究方法の根底には、奇をてらうこと以上の理由が存在すると思われる。言うまでもなく、「初版」は、「オリジナルのもの」という点で、その存在価値と翻訳価値をもっている。同様に、「第七版」は、「最終の、完全なもの」という点で、その存在価値と翻訳価値をもっている。そうすると、「第二版」と「第三版」は、いかなる存在価値をもつことになるのであろうか。

グリム兄弟が初版を出版したとき、子どもの道徳的教育に拘り定規的にこだわる批判家たちは、『グリム童話集』に見られる残酷な描写や不道徳な描写は、子どもの道徳的教育という点で好ましくないと避難したのであった。この批判は、全面的に正しいものとは言えなかったのであるが、しかし、確かに行き過ぎの観がある描写もあつたのである。そこで、グリム兄弟は、第二版において、家庭内暴力や殺人、近親相姦、性的描写等を部分的に削除したのであつた。

